

Aṅguttara Nikāya にみられる出家者と在家者の役割

—— Etadagga vagga における「是第一弟子」を中心として——

Chaowarithreonglith Bunchird

有名な仏弟子のまとめ方といえば、北伝仏教では「十大弟子」が思い浮ぶであろうが、南方仏教では、「八十大弟子」(Asitimahāsāvaka) がよく知られている。両方とも、出家者である比丘について重視するものである。ところが、出家者だけでなく、在家者も含まれる仏弟子のまとめ方も存在する。それは、サーリプッタは智慧第一、モッガラナは神通第一というように、何かの専門的な能力や特性をもつ 75 人の仏弟子を、*Aṅguttara Nikāya* の Etadagga vagga の中にまとめたものである。本稿では、これらの仏弟子のことを、「是第一弟子」と呼ぶことにする。

1. 経典に見られる「是第一弟子」

是第一弟子のことを直接述べる経典は、次のとおりである。

- ① *Aṅguttara Nikāya* の 'Etadagga vagga'¹⁾ (以下は、EV)
- ② 『増一阿含経』²⁾ (「弟子品」「比丘尼品」「清信士品」「清信女品」)
- ③ 『阿羅漢具徳経』³⁾ (以下、『具徳経』)

EV の内容は具体的にどのような記述になっているかを簡略に示しておく。

Etad aggaṃ bhikkhave mama sāvakānaṃ bhikkhūnaṃ rattaññūnaṃ yadidaṃ Aññākoṇḍañño.
mahāpaññaṃ yadidaṃ Sāriputto

(比丘達よ、我の弟子である比丘達の中で、出家して久しい者たちの第一はアンニャコーンダンニャである。大智慧ある者たちの第一はサーリプッタである。…)

(AN.I.p.23ff.)

上の引用を見てわかるように、この経典の内容は、ただ是第一弟子の名前と彼らの専門的な能力(や特性)を並べているだけで、実に名前リストに近いものである。また、この比丘の部分の後に、同様に是第一弟子とされる比丘尼、優婆

塞, 優婆夷も順に列記されている。『増一阿含經』と『具徳經』も同様である。

◎是第一弟子の人数の比較：是第一弟子の人数は, 經典によっては大きい相違が見られる。漢訳伝承においてその人数は, EV よりも大きく上回っている。以下は, その‘合計人数 (比丘, 比丘尼, 優婆塞, 優婆夷)’という形で示す。

EV : 75 人 (41 人, 13 人, 11 人, 10 人),
 『増一阿含經』 : 223 人 (101 人, 50 人, 40 人, 32 人⁴⁾),
 『具徳經』 : 153 人 (99 人, 15 人, 22 人, 17 人)

◎經典の内容の比較：この三つの經典の内容, つまり是第一弟子の‘個人名’と‘その能力’はどの程度に合致しているかを厳密に検討する。EV を基にして, それと合致するものを漢訳經典の中から選出するという方法で検討する⁵⁾。

EV との合致度	『増一阿含經』	『具徳經』
比丘 (41 人のうち)	38 人 (約 93%)	40 人 (約 98%)
比丘尼 (13 人のうち)	11 人 (約 85%)	11 人 (約 85%)
優婆塞 (11 人のうち)	8 人 (約 73%)	9 人 (約 82%)
優婆夷 (10 人のうち)	5 人 (約 50%)	9 人 (約 90%)
合計 (75 人のうち)	62 人 (約 83%)	69 人 (約 92%)

上の表を考察すると, この三つの經典の内容はよく一致していることがわかる。EV の内容は, その 8～9 割以上は, 『増一阿含經』と『具徳經』の中に見出すことができる。いわば, この三つの經典は同一の源泉から発して, 漢訳伝承の方では, 是第一弟子の人数は著しく付加されていると推定できる。また, この三つの經典の中で, もっともその源泉に近いものは EV であると考えられる。

2. Manorathapūraṇī と『分別功德論』

EV と『増一阿含經』には, 順に Manorathapūraṇī (AA) と『分別功德論』という註釈書が現存し, それぞれ, 是第一弟子の‘伝記’を伝えているため, この両註釈書を比較して, 是第一弟子の‘伝記’の共通点を探ってみたい⁶⁾。

AA では, EV の是第一弟子の全員を註釈しているが, 『分別功德論』では, 『増一阿含經』の 223 人のうち, 60 人しか註釈されていない。この両註釈を比較してみると, 『分別功德論』が註釈する 60 人のうち, その個人名が AA と合致しているのは 33 人である。またその 33 人のうち, それらの伝記に関する記述があるのは, 25 人である。とすると, 『分別功德論』が伝承してきたこの 25 人の是第一弟

子の伝記と、AA が伝えてきたその 25 人の伝記との比較によって、20 人ぐらいも⁷⁾の伝記が類似していることがわかる。なお、ここの「類似」とは、両註釈書の間に同じ原本や同じ表現を持っていることを指すのではなく、ただ第一弟子の伝記の中に、そのストーリーやその骨子が同じであることを意味している。

このようにして、南北両伝にそれぞれ伝わってきた是第一弟子の伝記の間には、かなりの共通点があるということは、両註釈書のソースは同じであるか、または同じ内容を持つものである。つまり、そのソースが早い年代に成立し、南北両伝に伝承されてきたと考えられる。

3. 出家者と在家者の役割

別の視点で見てみると、經典に見られる是第一弟子は、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷にとって、仏教教団の手本であり、それらの能力・特性は見習われるべきものとも言える。従って、是第一弟子の専門的な能力を、出家者と在家者ごとに分けて考察すると、出家者と在家者の行うべき役割として理解することもできる。是第一弟子の能力・特性を分けてみると、次の表のとおりである。

能力・特性の分野	出家者		在家者		合計
	比丘	比丘尼	優婆塞	優婆夷	
説法・口伝	19	2	1	1	23
教団運営・布施	7	1	5	3	16
解脱・信仰	4	3	3	3	13
神通力	7	4	—	—	11
頭陀・修行・禪定	7	3	—	1	11
その他	3	—	1	2	6

上の表を見ると、比丘には、「説法・口伝」に関わるものが最も多く、優婆塞、優婆夷には、「教団運営・布施⁸⁾」に関わるものが最も多いことがわかる。つまり、EV が単なる仏弟子の名前のリストだけではなく、仏弟子の役割を示しているものとして捉えて見てみると、出家者の役割は、仏陀の教えを伝承することに、在家者の役割は、教団を支えるための布施を行うことにあるということも読みとれるのである。

今後はこの是第一弟子の伝承がどのようにして成立したかという問題を解明するために、*Theragāthā* や *Apadāna* や *Asokāvadāna* などとの関連も視野に入れて研究を進めたい。

【付記】拙稿は、大谷大学任期制助手の清水洋平氏からの多大なる協力を得た。この場を借りて甚深の謝意を表する。

-
- 1) AN.I, pp.23-26.
 - 2) T02, pp.557a-560c ; 『増一阿含経』の所属部派については、静谷正雄「漢訳『増一阿含経』の所属部派」(『印度学仏教学研究』43号, 1973) pp.54-59によれば、大衆部、法蔵部、説一切有部という可能性が考えられるという。
 - 3) T02, pp.831a-834b.
 - 4) 本稿では、「難陀難陀婆羅」という名前を「難陀」と「難陀婆羅」に分けて二人と見る。『具徳経』でも *Divyāvadāna* (E.B.Cowell & R.A.Neil, 1886) p.392 でも二人としていることがその根拠である。
 - 5) ‘個人名’と‘能力’のどちらかが一致すれば「合致するもの」とし、どちらも一致しない場合は「合致しないもの」とする。
 - 6) 森祖道「On the Fēn-bié-gōng-dé-lùn (分別功德論)」(『印度学仏教学研究』37号, 1970) pp.32-38(L)によると、『分別功德論』はAAと直接的な関係を持っていないという。この見解について、筆者も賛同する。
 - 7) 類似していると判断できる17人(優陀夷, 優留毘迦葉, 羅叱婆羅, 大迦旃延, 大目犍連, 二十億耳, 陀羅婆摩羅, 軍頭婆漠, 賓頭盧, 婆拘羅, 優波離, 難陀, 婆陀, 周利般兔, 拘摩羅迦葉, 羅雲, 般兔)に, ある程度類似している3人(阿那律, 離日, 鵬耆舍)を加える。
 - 8) 「布施」については, 仏教教団の外部から教団運営を支えるものとして見ている。

〈キーワード〉 仏弟子, Etadaggavagga, 『増一阿含経』, 『阿羅漢具徳経』, 『分別功德論』
(大谷大学大学院)

from the *Yogācārabhūmi* and the Sautrāntika's *Abhidharmakośabhāṣya* in its criticism of the Sarvāstivāda school's theory that dharmas exist in past, present, and future.

85. The Role of Monks, Nuns, and Laity in the *Āṅguttara Nikāya*: 'the excellent disciples' in the Etadagga vagga

Bunchird CHAOWARITHREONGLITH

In the Etadagga vagga of the *Āṅguttara Nikāya* (AN. 1, pp. 23-26) appear many names of "the excellent disciples" — those who possessed special skills or characteristics. For example, Sāriputta was renowned for his profound wisdom. The excellent disciples include not only monks, but also nuns and laity. We find two other Chinese texts which correspond to the Etadagga vagga. They are the *Ekottarika Āgama* (T. 2, pp. 557a-560c) and *Aluohan jūde jīng* (阿羅漢具德經) (T. 2 pp. 831a-834b). The three sources do mention these excellent disciples, although the numbers of excellent disciples mentioned differ. However, after a comparative study on the excellent disciples' names and skills, it can be said that these texts belong to the same origin.

In addition, the *Manorathapūraṇī* and the *Fenbie gongde lun* (分別功德論), the commentaries on the Etadagga vagga and the *Ekottarika Āgama* respectively, include life stories of these excellent disciples, and they are also based on the same original source.

The stories of the excellent disciples exemplify the ideal Buddhist community where, as pointed out in the Etadagga vagga, monks' and nuns' role is to transmit Lord Buddha's teaching to the next generation, and laity's role is to give the Buddhist order their support.

86. A Study of Dharmatāśīla

Satoru HARADA

The *dkar chag lDan dkar ma* (A.D. 836) mentions 11 Tibetan translations of the Buddhist scriptures, which are translated by shus chen gyi lo tstsha ba